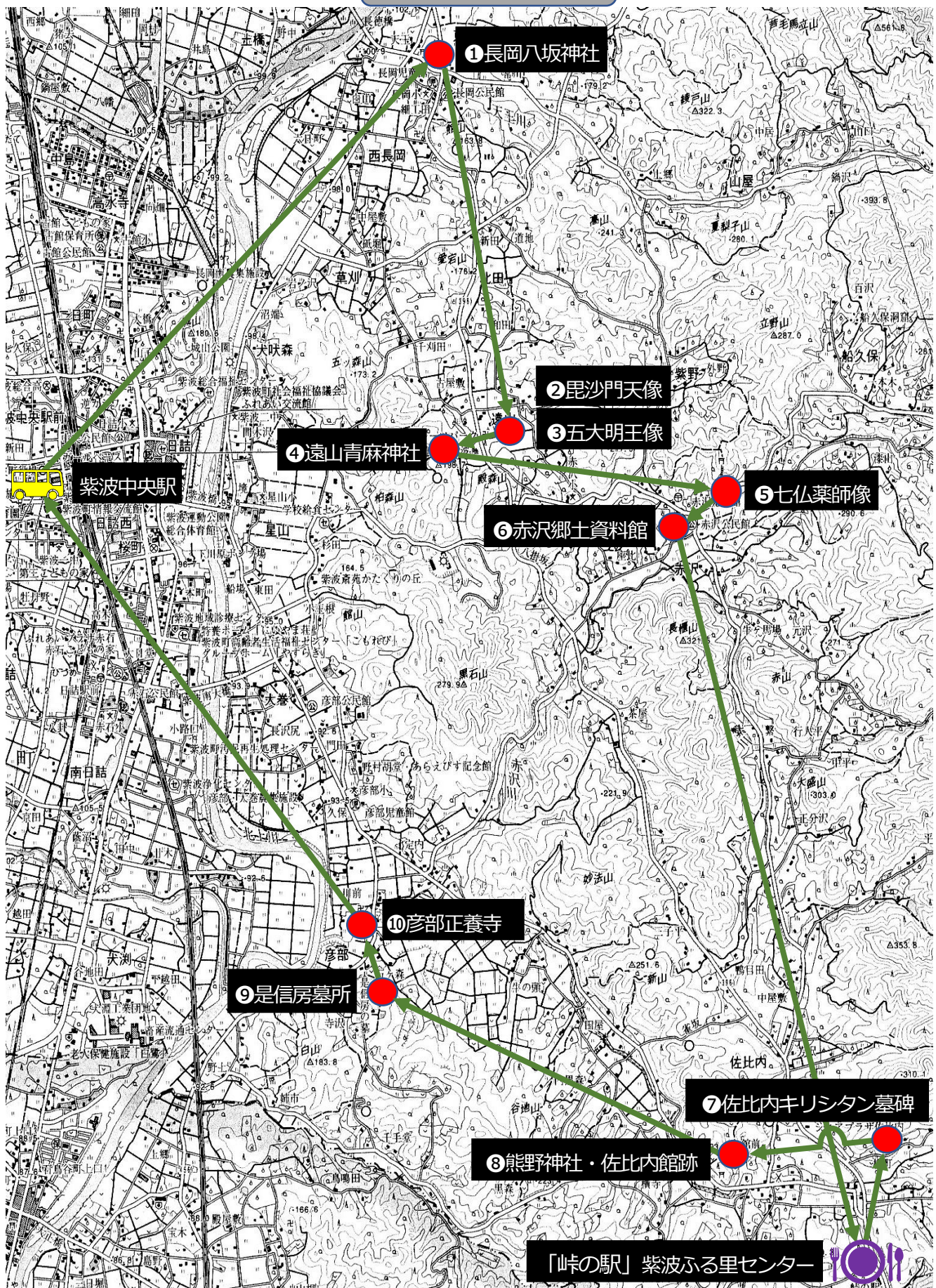


行程表

着時刻 発時刻		滞在時間 (分)	巡回場所	現地ガイド
発	08:30		紫波中央駅	
着 発	08:40 09:00	20	長岡八坂神社	七木田 一善 氏 長岡歴史研究会事務局長
着 発	09:10 09:50	40	毘沙門天像・五大明王像（正音寺） びしゃもんてんぞう ごだいみょうおうぞう しょうおん じ	石亀 孝文 氏 正音寺住職
着 発	09:55 10:25	30	遠山青麻神社 とおやまあお そ	紫波歴史研究会
着 発	10:35 11:05	30	七仏薬師像（赤沢薬師堂） しちぶつやくしぞう	石亀 孝文 氏 正音寺住職
着 発	11:05 11:25	20	赤沢郷土資料館	古澤 友治 氏 赤沢郷土資料館
着 発	11:35 12:35	60	昼食 「峠の駅」紫波ふる里センター	
着 発	12:40 13:00	20	佐比内キリシタン墓碑 さ ひ ない	山下 研悦 氏 佐比内山ひだの会会長
着 発	13:05 13:35	30	佐比内館跡・佐比内熊野神社	山下 研悦 氏 佐比内山ひだの会会長
着 発	13:45 14:15	30	是信房墓所 ぜ しんぼう	八重嶋 勲 氏 彦部の歴史を深める会会長
着 発	14:20 14:45	25	彦部正養寺 ひこ べ しょうよう じ	八重嶋 勲 氏 彦部の歴史を深める会会長
着	15:00		紫波中央駅	

巡回マップ



① 長岡八坂神社

延暦年間、坂上田村麻呂が蝦夷の首領大猛丸を紫波郡長岡村の朝日ヶ郷で討伐し、京都に帰る。翌年、この地に素盞鳴尊^{すさのおのみこと}を勧請し武運長久を祈らせた。その後、斯波氏、南部氏と代々、此社の崇敬厚く、寛永9年（1632）、南部利直^{としなお}が当社に牛頭天王^{ごず}の尊称を与えた。その後、南部氏代々崇敬の神社となり、志和稻荷社参拝の折、必ず、立ち寄る。

貞享年間（1684）、火事で本社、末社ともに焼失。元禄年中（1688～1704）、4代南部重信、社殿を再興す。13代南部利済^{としただ}、参拝のため、456号線、承慶橋（のちの紫波橋）から八坂神社、翌年は盛岡まで、道路整備を行う。昔は朝日森社とも牛頭天王社とも呼ばれたが、明治4年5月14日（太政官布告）、盛岡県神祇官において郷社となり、八坂神社と改めた。（文責 長岡歴史研究会）

牛頭天王と八坂神社 盛岡藩の社堂記録である『御領分社堂』^{ごりょうぶん}によれば、江戸時代には「牛頭天王社」と呼ばれているが、建立された当時の神社名は不明である。盛岡藩から社領を寄進され、度々造営・修復などの保護を受け、東部地域では白山権現社（白山神社）^{はくさんごんげん}や熊野権現社（熊野神社）^{ごんげんしゃ}とともに格式ある神社とされた。花巻市北湯口の八坂神社も南部利直の造営を伝えており、当社も羽黒修験^{はぐろしゅげん}の影響が考えられる。

奈良時代から平安時代にかけて、天災や疫病の流行は死者の怨霊^{おんりょう}や怨念の仕業と見なされ、その怨霊を丁重に祀ることで、逆に恩恵をもたらす神（御霊）^{ごりょう}になるという御霊信仰が興った。疫病神の牛頭天王を祀る京都八坂神社なども御霊信仰であり、その鎮魂儀礼である御霊会^{ごりょうえ}は、神仏習合的な神事といえる。これは疫病や災厄をもたらす神に対する従来の信仰と、故人の冥福を祈る仏教思想が融合し、神道ではスサノオノミコト、仏教では薬師如来と習合した新しい信仰である。

牛頭天王は、疫病を広める行疫神・疫病神として恐れられたが、祀り鎮めることで疫病から逃れられるという除疫・防疫の神、さらには農業神など万能的な神として、平安時代末期から中世にかけて、新たに、あるいは古くからの祭神とともに各地に勧請された。その後、従来の祭神を押し分け、牛頭天王を主祭神とし、社名までもが変えられることもあった。長岡八坂神社もこの例と考えられる。

明治政府は牛頭天王など、神仏習合の神を否定し、さらに「天王」と「天皇」が重なることを不敬と考え、牛頭天王を祭祀する社堂は、社名を八坂・津島・八雲などに変えることや、祭神をスサノオノミコトに変えることを求めた。この神仏判然政策によって多くの八坂神社が誕生した。（文責 大沼 信忠）



八坂神社参道



八坂神社拝殿参

② 毘沙門天像

毘沙門天街道 北方を守護するという毘沙門天像が北上川流域に多く祀られている。この流域に住む蝦夷を調伏するためと説明される。奥州市藤里、北上市立花、花巻市成島の毘沙門堂の兜跋毘沙門天立像は、いずれも東北地方を代表する毘沙門天立像で、国の重要文化財に指定されている。毘沙門天像がたどった道程は、「毘沙門天街道」と呼ばれる。平安初期に坂上田村麻呂が北進した足跡でもあり、紫波町では正音寺（曹洞宗）に祀られている。

毘沙門天像は北上川流域に多く祀られているが、秋田・青森地方ではなぜか少ない。東北開発に多大な功績を残した田村麻呂は、生前から毘沙門天の化身として評価され、その事績は伝説として語り継がれている。

毘沙門天とは 毘沙門天は、仏教では四天王の一人に数えられる。四天王がそろうときは多聞天、単独のときは毘沙門天と呼ばれる。中国において武神としての信仰が生まれ、密教では北方を守護することから戦いの場には軍神として祀られた。その像容は怒りを表現する憤怒の形相で、武将風の姿で表現される。右手に宝棒または鉾をとり、左手に宝塔を捧げることが多い。戦で敵に囲まれたとき、地天女は兜跋毘沙門天を地中から押し上げて登場させ危機を救ったとされる。

正音寺の毘沙門天像 正音寺の「五大明王像」と同じく、赤沢蓮華寺（廃寺）に祀られていたとされる平安仏である。かつて赤沢薬師堂に安置されていたが、それ以前の安置場所や毘沙門堂の存在については不明である。この像が制作された平安時代後期、東部赤沢地区は国家の版図に組み入れられており、蝦夷調伏の祈願というより、英雄化された坂上田村麻呂の化身として祀られたか、あるいは、中断していた征夷事業の完遂・勝利祈願を目的に祀られたのかも知れない。

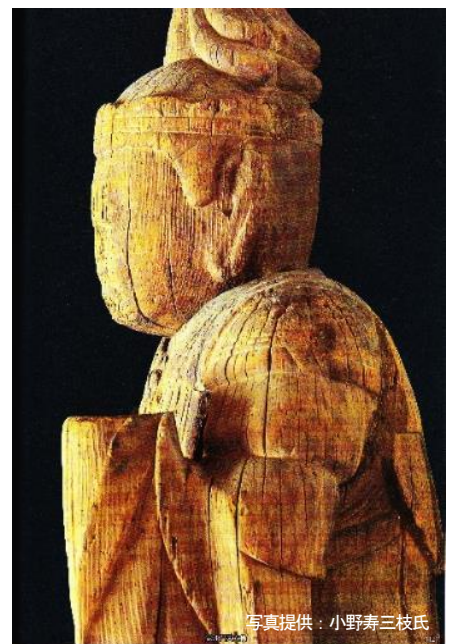
前九年合戦で安倍氏が滅亡した後、清原氏はこの合戦を平定した功績で鎮守府将軍に登用された。合戦終了後、志波地方を統治した清原氏は、征夷の完遂を目的にした「延久二年合戦」（1070）などで、鎮護国家の法要を営む地位にあった。

この像は、ヒノキ造りで、腰を左にひねり、穏やかな動きのある姿勢で、像高は約174cm。立花毘沙門堂（北上市）の毘沙門天立像（市指定文化財）と様式的に類似する。12世紀頃の制作と推定されており、平泉藤原氏の時代と重なる。県指定文化財である。

（文責 大沼 信忠）



写真提供：小野寿三枝氏
毘沙門天像（正音寺）



写真提供：小野寿三枝氏
毘沙門天像（正音寺）

③ 五大明王像

五大明王とは 仏像は、如来・菩薩・明王・天部などに大別される。明王は、密教（教団内で非公開で行う秘密の教義と儀礼）の本尊である大日如来の命を受け、怒りの形相である忿怒相で仏教に帰依しない民衆を教化・畏怖・調伏する役割を担う仏法の守護神の総称である。

「五大明王」とは、本来は別個に成立した不動明王・降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・金剛夜叉明王（天台宗では烏枢沙摩明王）の5明王を集成したもので、画像では「五大尊」と呼ばれることもある。

密教は平安時代前期に隆盛したが、五大明王を本尊とする密教の修法では、五大明王を5つの壇にそれぞれ安置して調伏や出産を祈願する「五壇法」が貴族階級を中心に信仰された。

摂関期から院政期には、律令体制の解体や末法の到来を背景に社会不安が助長され、密教の修法は国家鎮護の枠を超え、天皇・貴族の私的な祈禱として多様な修法が行われた。五壇法もその一つである。五大明王を祀る「五大堂」は、平安時代後期の寺院においては重要な堂宇建築の一つであった。

赤沢の五大明王像 赤沢地区は古くから産金地帯と知られ、音高山を中心に白山権現社（赤沢白山神社）が創建され、別当寺である蓮華寺（廃寺）は一大伽藍を構成していたと考えられている。それを裏付けるように赤沢地区には複数の平安仏が残されている。赤沢の五大明王像は、正音寺の「毘沙門天像」や赤沢薬師堂の「七仏薬師像」と同じく、かつて赤沢蓮華寺に祀られていたとされる平安仏である。

5つの明王で一具（組合せ）となり、「五大明王」と呼ばれるが、正音寺の明王は代表仏である不動明王を欠き、4軀（体）の明王像で一具となっている。このため地元では「四大明王像」と呼ばれている。

この4軀の像は、かつて赤沢薬師堂に安置されていたが、薬師堂以前の安置場所やそれを祀る五大堂の存在を示す記録類は伝わっていない。これらの像はカツラ材の一木造りで、4軀の両手はすべて失われている。

大威徳明王は神の使いである水牛にまたがっている姿で表現されることが多い。江戸時代の『仏像図彙』でも水牛に乗った坐像姿で表現されている。ところが赤沢正音寺の像はなぜか立ち姿で表現されている。

この型式による図像は、『仁王経五方諸尊図』にみられるが、図像を実際に立体的な彫像で表現している作例は少なく、平安時代後期の五大明王の造像作例として極めて貴重である。年代的に平泉藤原氏の時代と重なり、像の発願に樋爪氏などの関与が推測される。県指定文化財である。（文責 大沼 信忠）



軍荼利明王



降三世明王



大威徳明王



金剛夜叉明王

④ 遠山青麻神社

遠山青麻神社 遠山青麻神社の両部鳥居や長い石段、奥深い広大な境内地は独特の神域感を感じさせる。東北地方に鎮座する青麻神社及び関連社は20社にも満たないが、県内では遠山青麻神社と花巻青麻神社が確認できる。このような希少・特異な神社がなぜ紫波町東部地区に鎮座するのだろうか。

遠山青麻神社は、社伝では、源義家が安倍氏との戦いである前九年合戦の際、戦勝を祈願し、古くからの社殿を再建したという。元の地主神の名称、義家が勧請・奉祀した祭神などは記録類を欠き不明である。

藩政時代の青麻神社は、「青麻三光宮」と呼ばれ、貞享3年(1686)に青麻三光神を勧請したとする『青麻岩戸三光宮縁記』(写)が残されている。本尊として「北辰尊星三大士の化身、常陸房海尊仙人」が祀られていることが記録されている。御利益は、「降魔調伏、延命の他に、疱瘡、麻疹、安産、中風の諸術を尽くし」とある。盛岡藩の社堂記録である『御領分社堂』には、なぜか遠山青麻神社の記録はないが、藩政期には本山派修験の善養院が別当を務める社堂であった。寛政年間(1789～1801)は立性院とも称していた。文化年間(1804～1818)から天保年間(1830～1844)頃になると善養院が青麻三光宮を管理していた。

明治3年(1870)に「赤坂神社」と改称し、明治27年(1894)に現在の「青麻神社」に改めている。

青麻三光宮とは 太陽・月・星の「三光神」は、古くから人々の信仰の対象となっていた。青麻神社・三光神社の総本社である青麻神社(仙台市)の社伝によれば、仁寿2年(852)、社家の遠祖穂積氏が山城国(京都)から当地に下向し、穂積一族が崇拝する日(天照大神)・月(月読神)・星(天御中主神)の三光神を奉祀したのが創建の由緒と伝える。また、穂積氏が里人に麻の栽培を教えたことから「青麻」を社号にしたという。青麻(＝青苧)は、山野に自生する苧麻という植物から取り出した繊維で、苧とも呼ばれる。

青麻神社と常陸坊海尊 遠山青麻神社には、常陸坊海尊の霊験によって中風病を封じるという信仰が伝わっている。海尊は、源義経の忠臣として武蔵坊弁慶などとともに『義経記』や『源平盛衰記』などに登場するが、『平家物語』や鎌倉時代の正史である『吾妻鑑』には登場せず、伝承上の人物とされている。

海尊は各地の地誌類や縁起の中で、長寿を得た人物として民俗信仰の中に取り込まれ、仙人あるいは祭神として位置づけられている。遠山青麻神社の勧請は、仙台・平泉地方に伝播した海尊信仰が義経伝説と密接に関係しながら、同じ「義経伝説」を伝える近世志和郡に取り込まれたのだろうか。(文責 大沼 信忠)



遠山青麻神社の両部鳥居



遠山青麻神社拝殿

⑤ 七仏薬師像

七仏薬師と七仏薬師法 仏教では、一切の煩惱^{ぼんのう}やけがれを離れ、仏（悟った人）や菩薩（悟りを求める人）が住む清浄な国土（仏国）を浄土という。浄土では阿弥陀如来の西方極楽浄土、薬師如来の東方浄瑠璃^{じょうろうり}浄土、観世音菩薩の補陀落浄土などが著名である。平安時代後期に浄土教が広まると、浄土は主に阿弥陀如来の西方極楽浄土を指すようになったが、薬師如来は古くから病気を治す仏として根強く信仰されてきた。

七仏薬師とは、『薬師瑠璃光七仏本願功德経（七仏薬師経）』や『薬師如来本願経』で説かれている薬師如来を主体とした七尊の仏である。西の極楽浄土に対して、東には七仏薬師の仏国（＝浄土）が7つ並び、一番遠い7番目に薬師如来の浄瑠璃国（浄土）があると説かれている。

薬師信仰については、天武天皇が皇后の病気回復を願って薬師寺を建立したことが『日本書紀』に記録されているが、平安時代に入り密教修法が盛んになると、天台宗に伝わる密教（台密）では、薬師像7軀（体）を並べて延命・息災・安産などを祈る修法（七仏薬師法）が重視され、藤原摂関家で信仰が広まった。

赤沢の七仏薬師像 七仏薬師像は、画像として描かれる場合や本尊光背の七仏（六仏）と坐像本軀（体）で七仏を表す様式が多いが、7軀の仏像一組で表現されることもある。赤沢薬師堂の七仏薬師像は、7軀の仏像一組で七仏薬師として制作されている。このような形式の七仏薬師像は少なく、全国的には松虫寺（千葉県印西市）や鶏足寺（滋賀県長浜市）の七仏薬師が知られているに過ぎない。

松虫寺では中尊が坐像型式である。鶏足寺では7軀がほぼ同じ大きさである。赤沢の七仏薬師は中尊が大きくすべてが立像形式である。立像の中尊を中心に、小さな脇侍が3軀ずつ左右に並ぶ7つの仏像である。

木彫仏のため矧ぎ目の緩みや虫害による損傷があり、さらに平成23年（2011）の東日本大震災では一部の像が損傷したことから、虫害や転倒による損傷部分を修復するとともに、近世に施された金箔や漆を取り除く復元修理を施し、現在は平安時代の制作当初の状態に戻され、赤沢七仏薬堂に安置されている。中尊と脇尊2軀はホオの木、脇尊4軀はカツラに木が用いられている。

この七仏薬師像は、正音寺の五大明王像や毘沙門天立像とは違い、征夷の過程で命を落とした兵士や蝦夷の追善供養、人々の平穏な生活や一族の繁栄などを祈願する七仏薬師法の本尊として祀られたと考えられる。平安時代後期の作品で平泉藤原氏や樋爪氏の時代と重なる。県指定文化財。（文責 大沼 信忠）



七仏薬師像 脇仏1



七仏薬師像 中尊



七仏薬師像 脇仏2

⑥ 赤沢郷土資料館

資料館の沿革 赤沢郷土資料館は、赤沢の農耕具や民具など 250 点余の民俗資料を展示している。これらの展示資料は、昭和 43 年に赤沢地区老人クラブが明治百年を記念して地区内から収集したものである。

平成17年7月、収集した資料を活用するため、「赤沢の民俗資料を活かす会」（工藤真臣会長）が設立され、資料整理が開始された。翌18年3月に岩手中央農協旧赤沢支所を資料館として使用するための改修工事を行い、4月に開館の運びとなった。同年7月、遠山に倉庫を整備した。

展示資料 展示資料は、舟久保洞窟（県指定史跡）から出土した縄文後期の土器・石器類や昭和初年までの民具・仏具・農耕・養蚕^{ようさん きひき}・木挽・鍛冶・漆工などの用具、農作業着など広範囲に及ぶ。

この資料館の最大の特徴は、産金地赤沢を特徴づける道具類を展示していることである。ネコ流し板、ユリ大盤、カッチャビ、鉾山事務所看板など10点以上ある。岩手県で初めて確認された「せり板」は、鉾石を杵や臼で泥状にまで粉碎した金鉾石を水とともに板の上に流し、板の上についている格子状^{のこめ}の鋸目に金粉をひっかけて金を採取する道具で、全国で16枚目の貴重な資料とされる。

地域の歩みを伝える「モノ」 資料館の「あいさつ文」には、『歴史とともに時を刻んできた多くの遺物「モノ」は、現在にはまったく必要性がなく一見無価値なものであっても、その存在を知ること、更に保存すること自体が私たちの過去を知る大切な証明となりえます。（中略）「モノ」に親しく触れれば、往時の制作者や赤沢の人々の挑戦、苦闘、歓喜が時空を超えて共感することが出来ると信じております。』という文言が綴られている。この言葉の意味はすごく重く、民俗資料の保護の在り方を示している。

民俗資料は、従来、製作者や使用者、代替となる資料が多く残っていたことから、資料を後世に残す必要性についてはあまり議論されることがなく。さらに大量であるがゆえに、また生活に密着したものであるがゆえに、文化財的な価値は低くみられる傾向にあった。

ここに展示している資料は、赤沢の人々が日常生活の中で知恵を結集し、創造し、長年にわたり大切に使用され、継承してきたモノである。地域に根ざした衣食住・生業・信仰・年中行事など、先人が歩んできた歴史や風土に育まれた生活文化の変遷を理解する上で欠くことのできないモノでもある。赤沢の地に暮らした先人の生活の様子を語る歴史の証人であり、後世に伝えたい資料である。（文責 大沼 信忠）



赤沢郷土資料館の民俗資

⑦ キリシタン墓碑

南部藩家老日誌「雑書」(寛永13年<1636年>)、徳川幕府は南部藩重臣石井伊賀を召し「先年諸国切支^{せんぎ}丹詮議の時、東国にて南部領に切支丹の者最も多かりしこといかに」詰問あり、答えて「先年朴木山(志和郡佐比内)といえる個所に金山を^{たんば}発見し、京都の丹波弥十郎なるものに、金千枚の約束にて採掘工事を請負はしめしたところ、右弥十郎が引連れ来たりし千余人の^{おびただ}人夫中切支丹のものの多数あり、これ等の徒が付近の男女に宗旨を進め大いに領内の者迷惑となり居次第なり」とある。このことが佐比内切支丹の事始なり

南部藩最大の金山と言われる「朴木金山」は大工堀子の数一万三千人、小屋敷二千二百二十軒と佐比内に伝わる古書「^{ほおのき}厚朴金山書状」に記され、相撲、歌舞伎の興業あり、江戸、仙台から^{けいせい}傾城五百人、「山盛申す^{おびただ}夥しき事奥羽五十四郡、出羽十二郡両国に懸る名所あるましく皆々申来る」と書かれています。

大きな金山城下町には全国から逃れたたくさんの切支丹が潜み、坑道内には礼拝所が置かれ密かな礼拝が行われました。信心講という組織が作られ、山中深く協会が建てられました。

近くには後藤寿庵^{ごとうじゅあん}の弟子が多く潜む小山田村、宮守村があり、夜陰にまぎれ多くの信者が集まり、仙台領福原からの巡回神父が訪れ、「ミサ」も行われたといいます。

花模様の刻まれた墓石は切支丹の墓と言われます。花の形は十字を描き、三の文字は教義の「三位一体」を表します。信仰を捨てず異郷の地で果てた切支丹達の遺跡です。地域内には「隠れ切支丹」として土着した人たちの遺構、伝聞も多数伝わります。

東北の切支丹指導者として名高い後藤寿庵について、菅野義之助著『奥羽切支丹史』には「後藤寿庵は仙台藩胆沢郡見分から逃亡し、久保田藩に逃れさらには南部藩に潜入したが、和賀郡小山田村、宮守村には寿庵の弟子が多数あり、元和年間日本最大の産金力を示した朴木金山が小山田村北面にあり、十字架と思われる花を刻んだ碑が三基残されており、寿庵の逃亡を推定しうる資料は残されている」と書かれています。

寿庵の墓はいまだ発見されず、この地の山中には多数の金山、切支丹遺構が残り、歴史ロマンが木陰に見え隠れします。(文責 山下 研悦)



花十字墓石



クロス(十字)を象った叶(口+十)の家紋

⑧ 熊野神社・佐比内館跡

熊野神社

「熊野神社由緒書」によれば、802 年（延暦 21 年）、蝦夷討伐のため坂上田村麻呂将軍が佐比内に布陣した時、大峰の地に蝦夷が祀る「お熊様」を発見し、そこにイザナミ、イザナギを勧請し「新山権現堂」と称したのが始まりとされる。佐比内神田館に居した斯波氏の一族河村喜助によって熊野大権現として社殿を改められた。斯波氏が南部氏に滅ぼされ神田館を焼き捨てて没落した。

1600 年（慶長 5 年）、河村氏末裔喜蔵なるものが修験者として、館を訪れ代々の祈願所たる熊野神社、荒廃に嘆き、館麓に天台宗喜明院と称する道場を結び、四季の祭祀をおこなう。村民深く領主の正統たるにおもんじこれを敬い。1605 年（慶長 10 年）、大峰より神田館に遷座を行う。領主遠野南部氏本社を参詣し、社領三石を寄進し代々の祈願所とした。

（文責 山下 研悦）



佐比内熊野神社拝殿

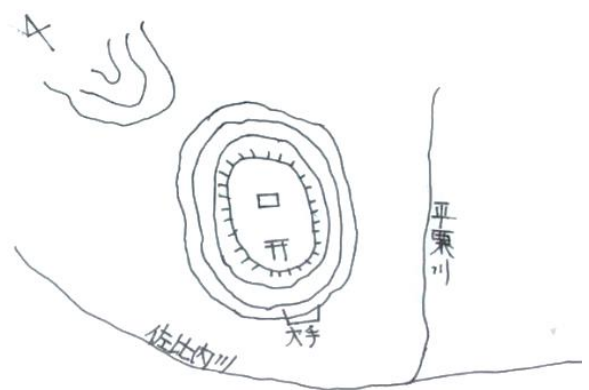
佐比内館

佐比内館前西の高地で標高 180m、低地との比高 70mの山城である。東方は低き尾根続きとはなっているがほとんどは孤立した山で、南北約 220m、東西約 200mの小山である。頂上平坦南北約 100m、東西 80mの地が城跡である。簡単な屋根型のもので特別な施設が認められない。

山麓の低地は、今は水田となっているが往時は掘割がめぐらされていた事だろう。大手は南側、居住館跡は南山下であろう。大巻の河村館より型式が古いので、河村氏は、入部当時は規模の小さいこの館に入ったか。この城は小城であるが、四面低地で山脚急峻、力攻め困難であるから一時防御力はある。

しかし優勢なる敵の攻撃に対しては長く保持することは困難である。然し河村氏領地の南界であり、且つ遠野街道殊に大迫に通じる隘路口を扼へているので各方面から侵入する敵に対して、河村領地の第一線の防御陣地である。南北抗争時代、南朝方の河村氏と北朝方稗貫氏とはにらみ合ったことだろう（沼館愛三著『南部諸城の研究』より）。

其の後、斯波氏の属将である河村氏は南部氏に敗れこの館も焼失したと言う。最後の館主重秀は佐比内の地で農耕生活に入ったと言われる（天正 17 年<1589>）。（文責 山下 研悦）



佐比内館縄張図

⑨ 是信房墓所

1 彦部の是信房

(1) 是信房とは

是信房^{ぜしんぼう}は、1180 年頃（今から 830 年前）京都で生れた。俗名吉田大納言藤原信明といい、朝廷（京都で天皇が政治を行うところ）に仕えていたが、思わぬ罪により、越前国（福井県）に流刑された。その後無実の罪であることがわかり、罪をゆるされたが、朝廷へは帰らず、出家して常陸国稲田というところで浄土真宗※を始めた親鸞聖人をたずねて弟子となった。ここでは是信房という名前になった。是信房は、親鸞聖人の高弟 24 人の内第 10 番の弟子（二十四輩第十番）。

※浄土真宗とは、阿弥陀仏（極楽世界を主宰する仏）の他力本願を信ずることによって、極楽浄土へ行けるという、仏教の教えの一つ。門徒宗ともいう。名号「南無阿弥陀仏」

(2) 是信房が東北地方～彦部へきたわけ

建保 3 年（1215、今から 795 年前）に、親鸞聖人から、奥州に行き浄土真宗をひろめよ、と命令され、岩手県和賀郡（現在は北上市）一柏村にしばらく住み、浄土真宗をひろめた。そのあと斯波郡彦部村の石ケ森に移り、本誓寺を建てて浄土真宗をひろめた。また、岩手県内、秋田県等にでかけ布教を行った。

文永 3 年（1266、今から 744 年前）10 月 14 日、86 歳で死去。花巻市柵内で火葬したと伝えられ、現在「上人塚」として小公園となっている。その後、彦部の石ケ森に葬られ、現在でも「是信房の墓」がある。地元では「お墓山」と呼んでいた。

本誓寺はその後斯波氏居城の高水寺城下の二日町に移り、更に南部氏が盛岡城を築いた時に盛岡に移った。彦部には、正養寺を建立、その弟が住職となった。代々石ケ森住職。

（文責 八重嶋 勲）



是信房墓所

⑩ 彦部正養寺

1 石森山正養寺とは

鎌倉時代(1215 年)に親鸞ぜ しんぼうの高弟是信房ほんせいじによって本誓寺が石ヶ森山下に開かれた。約 370 年を経て野火による堂宇焼失を機に、現在地に移転。第 16 世賢勝けんしょう（安土桃山時代 1584 年）の時、斯波詮直しば あきなおの招きによって石森山本誓寺は郡山二日町に移った。その数年後、政変によって斯波氏が亡命。南部氏が盛岡城しょうやうじを築いた江戸時代（1635 年）に盛岡に移った。第 16 世賢勝が彦部の川前の現在地に「石森山 正 養寺」を建て、第 16 世の弟、第 17 世教勝きょうしょうが後を継いだ。宝物として次のものがある。

- ① 「阿弥陀如来四方六字の 名 号」 名体不離の尊像ともいう。親鸞聖人御筆
- ② 「聖徳太子の木像」 親鸞聖人御筆
- ③ 「御嶽観音像」 吉田家持仏堂安置のものと伝えられる。

2 彦部氏お墓の説明碑文（正養寺墓地にあり）

彦部氏お墓

彦部家は、飛鳥時代あすかの第 40 代天武天皇の長子「高市親王」たかちが氏祖であり、第 21 代光朝が彦部氏の初代（「彦部家の歴史」）。建武年中(1334～1336)に斯波氏が紫波に來郡、高水寺城に居城。従ってきたその臣彦部氏は、彦部郷の機織館(彦部館)に定住。

郷土史料に、彦部新左衛門尉秀光、彦部六郎、彦部喜内の名が見られる。「彦部家の歴史」によれば彦部新左衛門尉秀光は中央において活躍している。

天正 16 年（1588）8 月、南部信直の攻撃により、斯波氏は山王海から秋田方面に逃亡。その際、彦部氏も従ったものと思われる。群馬県桐生市に武家屋敷を構えている彦部氏は、本流であり、当地の彦部氏はいつ頃にか、この本流から分れてこの地を治めた一族。

このお墓は、元は、彦部字後庵、屋号檀古の南側にあったが、昭和 47 年頃、区画整理の際にこの正養寺に移転した。

平成 22 年 8 月 建立

彦部氏顕彰会

（文責 八重嶋 勲）



彦部正養寺